

阪神間の俚謡採集から

2025.12.14

田辺眞人

1. 民俗芸能の世界

- (1) 一般の人々の生活の中で
- (2) うた・まい・おどり等
- (3) 芸能や競技の時と所

2. 神戸の俚謡から

「祝いめでたの若松さまよ 枝も栄えてはもしげる

「この座敷はめでたい座敷 鶴と亀とが舞を舞うよ

「この座敷はめでたい座敷 床なる掛けじを眺むれば

戎さんと大黒さんが相撲取る 戎さんが負けたら鯛もらおう

大黒さんが負けたら槌もらおう 福はこちらで皆もらおう

「このお庭の老松さまの一なる枝には一分金

二なる枝には二朱や小判が成り下がる 三なる枝には雄鶴雌鶴が巣を組んで

十二の卵を産み並べ その玉一度にかやりては 親もろともにと立つ時にゃ

金の盃黄金の銚子 飲めや大黒歌え戎 中で酌するここの皆さん 末繁盛

「御世は治まる思うこと叶うた 末は鶴亀五葉の松

「深江越えたら大日如来 高い高橋踊り松

「梅は岡本桜は生田 松は兵庫の湊川

「梅は岡本桜は吉野蜜柑紀の国栗丹波

「大石・新在家は何で髪岩屋 頭しらみが脇の浜

「得井東明は夜屋だんご 朝のしらがゆでほったした

「須磨の前田のかきつの中に アヤメ咲くとは知らなんだ

咲いてしおれてまた咲く花は 須磨の前田のかきつばた

「腰の痛いのにこの田の長さ 五月六月日の長さ

「とろりとろりと眠たい時にゃ 馬に五十ダの金もいや

「馬に五十ダの金ろうてみたら 何の寝たかろ眠たかろう

「お伊勢まいりをしたいぞや様と お手を引きおうて宮参り

「お前さんならわしはどこまでも ついて行きます江戸までも

「梅に惚れても桜に惚れな 同じ花でも散りやすい

「桜に惚れても梅には惚れな 梅にはホケキョの情夫がある

随想

「祝いめでたの若松さまよ 枝も栄えて葉も繁る。こう聞くと、東北の花笠音頭を思い出す人は多いと思う。しかし、少し違ったふしで、この歌詞が私たちの身近な土地で唄われていたことは、案外知られていないようだ。

神戸市の民俗芸能調査で神戸の街を歩いているうちに、ふるさと風物と素朴な心を唄った祖先のうたごえに接することができた。それらをいくつか紹介してみたいと思う。

祝いごとや祭りに必ず唄われる伊勢音頭という唄が、神戸の各地にあった。この唄は必ず、この祝いめでた……の歌詞で唄い始めるのだ。その後、人々は唄い伝えられたさまざまな歌詞で、祝いの気持ちを披露しあうのである。

「この座敷はめでたい座敷 鶴と亀とが舞いをまうよ ハアヤットコセー ヨーイヤナ」。

やがて祝い酒に酔った村人は、即興で、

「このお庭の老い松様の 一なる枝には一分金 二なる枝には二朱や小判がなりさがり、三なる枝にはお鶴め鶴が巣をかけて、二つの卵を生み並べ、その玉いちどにかえりて親もろともにと立つ時にゃ、金の杯こがねの銚子、のめや大黒うたえ戎、中で酌するここの皆さん、末繁盛」と、めでたいづくめの唄を唄いだす。多くの即興の歌詞のあと伊勢音頭は、「ごよは治まる思うこと叶うた 末は鶴亀 五葉の松」という唄で唄い納められるのであった。

その間の七七五調の歌詞は、またみこし唄にも転用されるものがあった。このようなはれの日の唄と違って、平常の労働の時の唄には、もつと心がにじみ出ている。

「腰の痛いのにこの田の長さ 五月六月 日の長さ。と、草取り唄はつらい仕事を唄う。が、とろりとろりと寝たい時にゃ 馬に五十ダの金もいや」という親すり唄では、別のお百姓が、馬に五十ダの金もろてみたら何の寝たかろ眠たかろ。と唄を返すのだった。苦しい労働のなぐさめに男女の情も唄われた。へお伊勢参りをしたいぞや様と お手を引き合て宮まいり。へお前さんならわしやどこまでも ついて行きます江戸までも。やがてそのような心情は

祖先のうたごえ

田辺眞人

美しく、へ梅に惚れても桜に惚れな 同じ花でも散りやすい。へ桜に惚れても梅には惚れな 梅にはホケキョの情夫がある。と、唄われる。そのうち、へ梅もいやなら桜も嫌い、桃(股)ともとの間が好き。などとヒワイな唄もとびだしてくる。

一方、近在の名所をおりこんだものもある。西国街道を京から下ってきた旅人の目に、神戸で最初にうつるのは、へ深江こえた大日如来 高い高橋おどり松。と唄われた深江の大日神社や高橋川のたたずまいであった。兵庫ではへ梅は岡本 桜は生田 松は兵庫の湊川。と、生田神社参道の桜や旧湊川堤の松の緑、岡本の梅林がめであらわれている。岡本の梅林は、より広くへ梅は岡本 桜は吉野 蜜柑紀の国 栗丹波。と、吉野の桜や紀伊の蜜柑と肩を並べる名所だったという。兵庫をすぎて須磨に到ると、その地の名家前田氏の門前に美しい花が咲いていた。人々は、へ須磨の前田のかきつの中に あやめ咲くとは知らなんだ。咲いてしおれてまた咲く花は 須磨の前田のかきつばた。と唄った。

歌詞の中には他の村を揶揄するようなものもあった。今に残る地名がもりこまれているのをいくつかあげてみる。へ大石 新在家は何で髪ゆわや(岩屋) 頭しらみが脇の浜。と村名をもじり、へ声屋かい餅、三条は難すい深江白がゆでだんご。へ得井、東明は夜ひる団子 朝の白がゆでほったした。などと食べ物でからかった。これらは、親すり唄や伊勢音頭のふしでも唄われていた。

歴史ブームといわれ民話や民芸が好まれるこのごろである。奈良や京都を訪ね、テレビで日本の伝説を見る一方で、私たちの周囲に残る祖先のあしあとにも眼をむけたいものだと思う。

近代都市神戸の中で消滅しようとしているこれら祖先のうたごえの中に、私たちに語りかける過去からの強い声があるようにも感じる。へ大雨たもれ充分のう、雲にしるけは無いかいな。あつてもものうても降ってくれ。これは六甲山地の北麓の村人が、かつて雨乞いの時に唄ったはやしである。切実な人々の声がきこえてくるようである。